

公開講演会記録

令和六年「新年に抱いた漠然とした不安」

映画監督・元NHKディレクター 河邑厚徳



時代がバブルを迎えているようだ。

世界で戦争が続き、政治の劣化、自然環境への破壊などが続くが、日本の株価や不動産などの実態を反映しているとは思えないバーチャルな高揚感。一部企業は失われた30年を克服したとまで新聞は描いている。そんな新年を占う元日に能登半島地震が起こり、震度はマグニチュード7・6で、気象庁は大津波警報を出した。国土地理院によると輪島市が最大4メートル動く地殻変動が確認されたという。地震被害救援への初動が遅れて東日本大震災や熊本地震での教訓が十分生かされていないという批判がある。

翌日には同じような時刻に羽田空港

で日本航空の516便と滑走路にいた海上保安庁の航空機が衝突して炎上した。日航機には乗客367人と乗員12人合わせて379人が搭乗していた。機体は衝突後に激しい火災を起こし乗客14人が負傷しながら、乗務員の誘導により搭乗者全員が脱出した。一方の海保機には6人が搭乗しており衝突により5人が死亡し機長が重傷を負った。海保機は能登半島地震の救援のために新潟航空基地に向かおうとしていた。まさに逢魔の刻に日本海側と太平洋側で起きた二つの災害は、天災と人災の違いがあるが日本列島の裏と表が

暗合するような不安な一年の幕が開いた。

私は昨年『丸木位里 丸木俊 沖繩戦の図 全14部』という画家・丸木位里と俊夫妻が共同で描いた作品を時間軸に沿って見つめるドキュメンタリー映画を制作した。映画は2023年に完成し、「平和・協同ジャーナリスト基金」より大賞を受賞し、2023年度キネマ旬報文化映画部門ベスト・テンで第3位に選定され、ますます沖繩という日本最南端の島に関心が高まる時代の到来を痛感した。多くの沖繩をテーマにしたドキュメンタリーがある中で、この映画はアートによって沖繩

戦の全容を描くという企画意図が評価されたようだ。映像記録や証言とは異なる切り口で沖縄の置かれた過酷さの総体をとらえようとした企画であった。画家・丸木位里と俊は一貫して平和を願い原爆の図、アウシュビッツ、

南京大虐殺などの戦争の悪と本質を描き続け、最晩年に沖縄戦に取り組んだ。明治以来、日本は戦争を繰り返した。明治以来、日本は戦争を繰り返した。太平洋戦争では全土が焼け野原となった。本土の戦争体験は空襲や空爆によるものだったが、唯一沖縄だけは米軍が上陸して直接の戦火を交えた地上戦だった。鉄の嵐と呼ばれる猛烈な艦砲射撃と戦闘で住民の四分の一が戦死した。丸木夫妻は沖縄戦では日本側には写真も映像も資料も残されていないことにこの戦争の本質があると考えた。多くが戦死し爆撃と戦闘で何もかも失われ後世に伝える記録がないほどの地獄だった。二人は絵を描くために、沖縄に家を借りてアトリエとし、徹底的に体験者の証言を聞き、現場に足を運び、あらゆる文献に目を通した。そうして6年かけて目に見えるドキュメン

ト絵画を残した。絵からは沖縄の人々への愛おしさと想像を絶する戦争悪が見る人の心をとらえる。絵から人々の泣き声や諦念のつぶやきがずっと聞こえ、平和の重みを訴える作品が完成した。

沖縄戦は1945年に終わったが、戦後も一貫して沖縄に背負わせてきた負担、琉球諸島で着々と進む戦争準備など、沖縄戦は過去の歴史ではない。現在も島民の反対にもかかわらず辺野古では米軍基地が建設され、与那国島、石垣島や宮古島などに自衛隊基地が建設されミサイルの配備が着々と進んでいる。

正月の事件で改めて思い出すのが昨年の11月29日に屋久島沖に墜落したオースプレイの事故であった。乗組員8名が死亡したが原因は明らかではない。嘉手納基地に向かって飛行中で幸い住民には被害はなかったが、本島や近海で墜落したら大惨事が起きた可能性もある。昨年4月6日には宮古島沖で陸上自衛隊のヘリコプターが墜落し、乗務員10人が全員死亡している。日米両

国が琉球弧で軍事強化を進めていることと無縁ではない。

故安倍晋三首相が2021年12月1日に台湾で開かれたシンポジウムにオンライン参加し「台湾有事は日本有事であり、日米同盟の有事である」と発言している。軍事強化を国是とする岸田総理は23年から5年間の防衛費の総額を43兆円とするようにと指示した。それまでの中期防衛力整備計画が総額27兆4700億円であった事実を見れば5割以上増額し、日本の防衛予算は1・5倍に拡大した。

正月の気分に戻すと、平安な初夢とはならず小松左京の『日本沈没』を思い出した。刊行されたのは1973年だったので半世紀前の悪夢である。当時は終末思想、巨大地震、オカルトなどいわれのない不安を日本人は抱えていた。SF作家の小松左京は、日本海溝で起きた地殻変動で日本列島が壊滅するストーリーを書き上げた。日本海側と太平洋側がつながればどうなる。かつて存在していたパンゲア大陸のように日本列島が地球上から消滅すると

いう悪夢。小松左京は戦争世代で、一億玉砕とか本土決戦という熱病にかかっていた日本人に、勇ましいことを言うなら一度ぐらい国を失い、日本とは何かを考えてみたらとインタビュで答えている。

明治以来約80年は富国強兵の号令の下で、日清・日露・日中事変から太平洋戦争と戦争を続けてきた。敗戦後はお金とモノの豊かさを目標に、日米安保の傘のもとで平和であり続けてきた。その戦後も80年が過ぎた。80年+80年。今年大きなターニングポイントを迎え、日本は戦争をできる国へとその姿を変え始めている。日本沈没は戦争に近づくなという警鐘ではないだろうか。

悪夢が覚め希望がどこにあるのかを考えた。芸術には平和を作り出す力があるのではないか。人に戦争を呪わせる百千の理屈よりは数分の鑑賞で戦争のおろかさを教えてくれる。人は理屈だけではなく心で動く存在でもある。アートの力で改めて平和の重みを訴えることに私の希望がある。「沖縄戦の

図」からは、亡くなった子どもたち、女性たち、おじいやおばあの祈りとつぶやきが聞こえてくる。映画は、今後沖縄を知るために最初に接する映像となり、歴史を学び、市民の手で平和な未来を選択するよすがになってほしい。日本が沈没する前に、若者や子どもたちにも見てほしい。

(2024年2月1日・公開講演会)

筆者略歴(かわむら・あつのり)

1948年愛知県生まれ。東京大学法学部卒業後、1971年にNHK入局。

ETV特集・NHKスペシャルなどを中心に現代史、芸術、科学、宗教、環境などを切り口にノンフィクション番組を制作。現代の課題に独自のな方法論で切り込み、映像を生かして、広く理解できるように問題提起をしてきた。現在は映画を中心に制作を続けている。

映像作品に『鉛筆と銃 長倉洋海の眸』(2023年)、『丸木位里 丸木俊 沖縄戦の図 全14部』(20

23年)、『天地悠々 兜太・俳句の一本道』(2019年)、『笑う101歳×2笹本恒子 むのたけじ』(2016年)、『3D大津波 3・11 未来への記憶』(2015年)、『天のしづく 辰巳芳子 しのちのスピード』(2012年)など。最新作の『丸木位里 丸木俊 沖縄戦の図 全14部』で2023年度 平和・協同ジャーナリスト基金より大賞受賞。2023年度キネマ旬報文化映画部門ベスト・テンの第3位となる。